



Title	シンポジウム 多様性と社会包摂のデザイン
Author(s)	
Citation	デザイン理論. 2022, 79, p. 78-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86322
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

シンポジウム 多様性と社会包摂のデザイン

●プログラム

■ 導入

「社会包摂デザインと社会包摂デザイン・イニシアティブの活動」

尾方義人（九州大学大学院 芸術工学研究院）

■ゲストによる講演

「認知症の人にも優しい記号のデザイン」

定村俊満（株式会社ソーシャルデザインネットワークス代表、日本サインデザイン協会常任理事）

「障害者本人から学ぶデザイン」

工藤真生（九州大学大学院 芸術工学研究院，サインデザイン）

「カラーユニバーサルデザインを超えて」

須長正治（九州大学大学院 芸術工学研究院，色彩学）

■ パネルディスカッション

「意匠のデザインと社会包摂のデザインとのあるべき関係をめぐって」

尾方義人，定村俊満，須長正治，工藤真生／モデレータ：伊原久裕

●告知文

分断の時代といわれて久しいこんにち、「包摂（インクルージョン）」という概念は「多様性」とともに広く注目を集め、アートやデザインを含むさまざまな分野でこの概念に沿った実践がはじまりました。九州大学においても、インクルージョン支援室の設置をはじめ、芸術工学部局における社会包摂デザインイニシアチブの設立と運営など、活発な活動が進められています。シンポジウムでは、今年の東京オリンピックの図記号の策定にも関わられ、認知症者のためピクトグラムを調査提案された定村氏、色彩学の立場から色覚多様性をふまえたデザインのあり方を探られている須長氏、特別支援学校での知的障がい児のためのピクトグラム、文字の研究を進められている工藤氏を迎え、包摂の理念とデザインの関係について議論を行います。

シンポジウム

多様性と社会包摂のデザイン

講演 01

多様性と包摂をいかに実現できるか

多様性デザイン・デザイン・テクノロジー・ネットワーク・フォーラム
 東京大学大学院工学系研究科デザイン学専攻 教授 佐藤 大
 東京大学大学院工学系研究科デザイン学専攻 准教授 佐藤 大
 東京大学大学院工学系研究科デザイン学専攻 准教授 佐藤 大

1920年代後半から1950年代前半のアメリカ合衆国では多様性（人種・民族・宗教・性指向・年齢・身体的能力）を尊重し、すべての人々が社会に参加できるように設計することが求められました。この考え方は、今日の多様性デザイン（Diversity Design）の基礎となっています。本講演では、多様性デザインの実践的なアプローチと、その社会的意義について議論します。

2021年10月12日（水曜日）午後1時～2時

講演者：佐藤 大（東京大学大学院工学系研究科デザイン学専攻 教授）

講演タイトル：多様性デザインの実践と社会的意義

講演 02

「多様性デザイン」の社会的意義

東京大学大学院工学系研究科デザイン学専攻 准教授 佐藤 大

1920年代後半から1950年代前半のアメリカ合衆国では多様性（人種・民族・宗教・性指向・年齢・身体的能力）を尊重し、すべての人々が社会に参加できるように設計することが求められました。この考え方は、今日の多様性デザイン（Diversity Design）の基礎となっています。本講演では、多様性デザインの実践的なアプローチと、その社会的意義について議論します。

2021年10月12日（水曜日）午後2時～3時

講演者：佐藤 大（東京大学大学院工学系研究科デザイン学専攻 准教授）

講演タイトル：多様性デザインの実践と社会的意義

講演 03

「多様性デザイン」の社会的意義

東京大学大学院工学系研究科デザイン学専攻 准教授 佐藤 大

1920年代後半から1950年代前半のアメリカ合衆国では多様性（人種・民族・宗教・性指向・年齢・身体的能力）を尊重し、すべての人々が社会に参加できるように設計することが求められました。この考え方は、今日の多様性デザイン（Diversity Design）の基礎となっています。本講演では、多様性デザインの実践的なアプローチと、その社会的意義について議論します。

2021年10月12日（水曜日）午後3時～4時

講演者：佐藤 大（東京大学大学院工学系研究科デザイン学専攻 准教授）

講演タイトル：多様性デザインの実践と社会的意義

講演 04

「多様性デザイン」の社会的意義

東京大学大学院工学系研究科デザイン学専攻 准教授 佐藤 大

1920年代後半から1950年代前半のアメリカ合衆国では多様性（人種・民族・宗教・性指向・年齢・身体的能力）を尊重し、すべての人々が社会に参加できるように設計することが求められました。この考え方は、今日の多様性デザイン（Diversity Design）の基礎となっています。本講演では、多様性デザインの実践的なアプローチと、その社会的意義について議論します。

2021年10月12日（水曜日）午後4時～5時

講演者：佐藤 大（東京大学大学院工学系研究科デザイン学専攻 准教授）

講演タイトル：多様性デザインの実践と社会的意義

最初に今回のシンポジウムの背景と経緯を報告する。2020年に発生した新型コロナウイルス流行に伴い、九州大学で予定されていた同年の大会が中止となり2021年に仕切り直しとして九州大学が再度担当することになった。今回のシンポジウムの企画案は2019年から検討をはじめていたが、2年越しにも関わらず登壇者を含めて内容に大きな変更はなかった。その間2021年4月に「社会包摂デザイン・イニシアティブ」が九州大学のセンター組織として設置されたことから、シンポジウムを意匠学会と同組織との共同開催とすることとした。そのため、本学会会員のみならず、社会包摂に関心を持つ一般の方々も多数参加したシンポジウムとなった。もっとも、当初は会場参加者を含むハイブリッド形式を予定していたが、結局のところ、緊急事態宣言期間内となり、オンラインに変更せざるをえなかった。とはいえ可能なかぎり会場の雰囲気伝えたいと考えて、オンラインではあるが、ひとりを除いて登壇者は会場参加とし、ライブ配信とした。こうした工夫からある程度の臨場感は維持できたのではないと思う。

さて、「多様性と社会包摂のデザイン」と銘打った今回のシンポジウムであるが、オリンピック・パラリンピック東京大会でもそうであったように現在盛んに議論されているテーマである。難しいテーマであるが、視覚記号と色彩のデザインに焦点を絞って議論を深めてゆきたいと考えた。個々のパネラーの報告については、次頁以降の各氏の文章をご参照いただきたい。ディスカッションでは、20世紀デザインの目標であった「標準」についての再検討の必要性や、障がい者のためのデザインという特殊解を探求することが、かえって健常者のデザインの向上につながるという指摘があり、包摂型社会におけるデザインのあり方が議論された。最後に、特にカラーユニバーサルデザインを長年研究されている須長氏から、多様性のある社会こそが可能性を持つ社会であることを認識すべきだという意見が、まとめとして提起された。短時間の議論であったが、デザインのインフラ部分を再考するシンポジウムであったと考える。

